

北海道大学哲学会『哲学』三十六号（二〇〇〇年七月） 抜刷

相対的同一次性

村上友一

相対的同一性

村上友一

はじめに

ジキル博士とハイド氏は同一であるか。この奇妙な問いに対して、スティーヴンソン¹の著作『ジキル博士とハイド氏』をご存じの方であれば、「両者は同一の人間ではあるが同一の人格ではない」と直ちに答えるであろう。いささか誤解を招く導入ではあるが、本稿が取扱いたいのは「人格同一性」の問題ではない。ここで注意を喚起したいのは、予備知識をもち合わせていなければ、この問いに対してどのように答えてよいのか分からないという点にある。この問いには、何か必要な情報が欠落しているように思われる。

実際、対象の同一性を「 x は y と同一である」($x=y$)という形式によって表現したときに、こうした混乱が生じることは希であるように思われる。しかし、P・T・ギーチによれば、「 x は y と同一である」は対象の同一性の不完全な表現形式であって、何らかの〈加算名詞〉(count noun)を補うことによって、すなわち、「 x は y と同一の F である」($x=_{F}y$)という形式を採ることによって完全なものとなる。同一性を主張するためには、「同一性の基準」(criterion of identity)が明らかでなければならないというわけである(1962/80, pp. 63-4; 1967-8, p. 3; 1973, p. 289)。

こうしたギーチの指摘は、さしあたり「対象の同一性は、その基準となる概念を前提とする」という主張として理解することができる。このような「同一性の概念依存性」(D)の主張として理解されるかぎりでは、ギーチの指摘はもっともらしく思われる。それにも関わらず、ギーチの所論が多くの反発を招いてきた

のは、彼がさらに「同一性の概念相対性」(R)を主張するからである。確かに、Dを保持しつつジキル博士とハイド氏のようなケースを顧慮するならば、「xはyと同一のFではあるが同一のGではない」 $((x =_F y) \wedge (x \neq_G y) \wedge (Gx \vee Gy))$ という事態がありうると認めねばならなくなるように思われる。Rが受け入れ難いものであるのは、Rを受け入れた場合には、共指示表現の代入可能性が否定されることになり、伝統的な同一性概念が無傷では済まないように思われるという点にある。以下では、まず、(1) 伝統的な同一性概念が前提するとされる「絶対的同一性」と、ギーチの支持する「相対的同一性」との係争点を明確にし、(2) Dを支持しつつRを否定しようとするD・ウィギンスの試みを検討する。その上で、(3) この対立が幻想にすぎないことを示す。そして最後に、(4) Rを保持しうる可能性を検討する。

1. 同一性とその基準

ギーチは伝統的な同一性概念が絶対的同一性を前提しているように見えると認めつつ(1967-8, p. 3)、あえて相対的同一性を擁護しようとする。その背後にあるのは、「質的相違も関係的相違もないのに数的に相違するというのは不合理である」という信念である(1973, p. 290; cf. 1967-8, pp. 5-6)。こうした信念によって、ギーチはライプニッツの悪名高き法則、いわゆる「不可識別者同一の原理」 $\forall x \forall y (\forall \phi (\phi x \equiv \phi y) \supset \exists F (x =_F y))$ を支持することになる(cf. 1967-8, p. 5)。しかも、ギーチの敵対者によれば、Rを支持するならば、いわゆる「ライプニッツの法則」 $\forall x \forall y \forall F ((x =_F y) \supset \forall \phi (\phi x \equiv \phi y))$ を維持することは難しくなる。なぜなら、「ライプニッツの法則」と「弱い反射性」 $\forall x \forall F (Fx \supset (x =_F x))$ から、Rの矛盾を示すことができるからである(Wiggins, 1980, pp. 19-20; Perry, 1970, p. 186)。さらに、Rが同一性概念を変更することになるとすれば、それは同一性概念と密接に関係する量化概念にも影響を与えることになる。W・V・O・クワインによれば、その影響は致命的なものである(1964, p. 101)。

こうした帰結は、絶対的同一性の支持者にとって到底許容できるものではない。弱い反射性を否定することは信じ難いし、「ライプニッツの法則」を否定するとすれば共指示表現の相互代入可能性は維持し難いものとなる(Wiggins, 1980, p. 22)。しかも、「不可識別者同一の原理」を認めることは、同一性を性質や関係の共通性に還元するという誤りを犯すことに他ならない(ibid., p. 55)。実際には、性質や関係の共通性は同一性から帰結するのである(ibid., p. 49)。かくして、彼らは「不可識別者同一の原理」を否定し「ライプニッツの法則」を支持することになる。

ライプニッツの二つの法則をめぐる、こうした対立構図から明らかのように、係争点は同一性関係とその基準Fとの論理的先後関係にある。ギーチは既述の信念に基づいて、 $(x =_F y)$ を $(Fx \wedge Fy \wedge x = y)$ と分割して表現することを禁ずる(1962/80, pp. 176-7)。これに対して敵対者は、同一性は原初的な概念であり(Wiggins, 1980, p. 49)、基準Fは同一性関係に対する「限定」として機能するにすぎないと主張するのである(Perry, 1970, p. 183-4)。しかしながら、ギーチが指摘しているように、「論理的先行性」という概念は明晰判明なものではなく、同一性記号を原初記号として認めなくても同一の論理体系を構築することは可能である(1973, p. 289)。どちらを支持するにせよ、論理的先行性への訴えは有効ではない。

論理的先行性への訴えによって雌雄を決することができないとしても、その論理的帰結が上に素描したようなものであるとすれば、ギーチの主張は到底受け入れられるものではない。Rの事例とされる言明は、曖昧な日常言語を形式化する際に、何らかの手違いを生じさせていると考えざるをえない(cf. Wiggins, 1980, pp. 23-43)。しかしながら、もちろんギーチ自身は、自らの主張がこうした破壊的な帰結を導くとは考えていない。彼によれば、相対的同一性を認めたとしても伝統的な同一性概念は少しも損なわれることはなく、むしろ絶対的同一性を採用するならばパラドクスが導かれる。伝統的な同一性概念は絶対的同一性を前提しているように見えるが、実際に前提されていたのは相対的同一性であった、とい

うのが彼の言い分である。まずはギーチの弁明に耳を傾けることにしよう。

ギーチは伝統的同一性の公理図式 $Fa \equiv \forall x (Fx \wedge x = a)$ を取り上げ、ある理論 T における任意の述語 F (一項述語には限定されない) について、二項述語 E_{xy} がこの図式の等号の代わりを果たすとすれば、 E_{xy} は「 T に相対的な同一性」を表現していると言ってよいと主張する。実際、ここで「 T に相対的な同一性」によって意味されていることは、 T における述語によっては識別できないという以上ではない。しかし、ギーチによれば、 T に相対的な同一性を定義するにはそれで十分なのである。それが保証されるだけで、 T においては共指示表現の代入可能性も保証されるし、量化理論に変更を加える必要もないからである (1967-8, pp. 3-5; cf. 1973, pp. 290-5)。

ここでギーチは批判に転ずる。実際、 E_{xy} が公理図式を満たすということは、 T において保証されているにすぎない。ギーチによれば、絶対的同一性を主張するということは、それにも関わらず T の有効範囲を越えて E_{xy} を同一性記号として使用することに他ならない。ギーチは絶対的同一性をこのように捉え、以下のように批判する。そのような同一性を主張するならばパラドクスに陥ることになるし (1967-8, p. 5)、「裸の個体」という無意味な想定を導くこととなる (1973, pp. 289-90)。

実際、このギーチの批判はいささか眉唾ものである。絶対的同一性の支持者がパラドクスに陥るような仕方では、自説を展開しているとは思われない。また、ギーチによって示されているのは、「同一性は理論に相対的である」ということだけであって、それによって R の可能性が示唆されているとは思われない (本稿、第4節参照)。幾分でも説得力をもつとすれば、それは絶対的同一性が「裸の個体」の想定を導くという批判だけである。というのも、既述のように、絶対的同一性の支持者たちは「不可識別者同一の原理」を否定しているからである。しかし、絶対的同一性はつねに「裸の個体」の想定を導くのであろうか。もし個体が裸ではなく、悩ましげに最後の下着を身に着けていたとしたらどうであろうか。この妖しい想定がウィギンスの本質主義のテーゼを誘うことになる。

2. 同一性と本質

ウィギンスの本質主義のテーゼは以下のように定式化される。「あらゆる x について、 x が存在するならば、つねに $F(x)$ であるような概念 F が存在する」(cf. 1980, p. 59)。この条件を満たすような概念 F を、ウィギンスは〈実体概念〉(substance-concepts) と呼ぶ (ibid., p. 64)。彼がこのような概念を導入する意図は、絶対的同一性と D とを両立させることにある。しかし、絶対的同一性を保持することによって、ウィギンスは D の含意を変化させることになる。なぜなら、相対的同一性の場合には、同一性の基準 F によって「同一性の種類」が確定されるのに対して、絶対的同一性の場合には、そこに含まれる個体表現の指示が確定されることになるからである (Perry, 1970, p. 185)。

実際、あらゆる質的变化を超えて対象の同一性を主張しようとした場合、その指示を同一に保つために〈実体概念〉が要求されるように思われる。というのも、蝶の生涯を追跡しようとした場合、「幼虫」のような〈段階種〉(phased-sortals) では役不足であり、「昆虫」のような〈実体概念〉が要求されるからである。こうした事実は、同一性言明に対して、一つの制限を与えることになる。「この蝶は一ヶ月前に芋虫であったものと同一である」という言明は、その基準として「昆虫」を補うならば真であるが「幼虫」を補うならば偽である。これを R の事例として認めないために、無時制の同一性言明においては、〈実体概念〉が同一性の基準とされねばならないであろう (cf. Shoemaker, 1971, p. 108-9)。

しかしながら、指示を確定し同一に保つためには、「昆虫」のような一般概念だけでは不十分であるように思われる。なぜなら、「昆虫」という概念の下には実に多くの対象が属するのであって、それだけでは指示を確定することさえできないであろうから。このような指示の多義性を解消するためには、その対象についてもっと多くの情報が与えられていなければならない。指示を同一に保つためには、どれだけの情報があればよいのだろうか。このような問いに対して、その対象について真であるような述語の一切合切を要求したのがライブニッツであっ

た。もちろん、そんな膨大な情報を処理することはわれわれには不可能である。かくして、ライブニッツは「それらすべてを認識しうるのは神のみである」と結論することとなった (*Discours de metaphysique*, §. VIII)。

もちろん、ウィギンスはライブニッツほど過剰な要求をしてはいない。実際、指示を同一に保つためには、〈実体概念〉はその存在過程を通じて対象を追跡することさえできれば必要十分である (Wiggins, 1980, p. 77)。この条件を満たすために、ウィギンスは〈実体概念〉が「実在的本質」を表現していることを要求する (cf. *ibid.*, 82-5)。なぜ指示を同一に保つためには、「実在的本質」で十分であるのか。この点をウィギンスは明らかにしてはいない。しかし、その点について深く追究する必要はない。彼の要求がライブニッツほど非現実的ではないとしても、やはり現実的であるとは思われないからである。確かに、「裸の個体」や「完全個体概念」とは違って、「実在的本質」は原理的に不可知なものではない (cf. J. Locke, *Essay concerning Human Understanding*, 2, 23, 11-3; 4, 3, 25)。しかし、背景としている理論が完成するまでは、「実在的本質」は依然として改訂可能性に開かれている。もし指示を同一に保つために「実在的本質」が要求されるとすれば、背景理論が完成するまで同一性言明の真偽は宙に浮いたままになるであろう。

実際、ウィギンスは〈実体概念〉が何であるかを知る必要はないと繰り返し強調していた。そのような概念の存在を想定してさえいけばよいというのである (Wiggins, 1980, p. 48, 80, 85)。しかし、完成された理論を想定しつつも、実際には、発展途上の理論を背景として指示を行うのであれば、そこに成立する同一性言明の真理性は、やはり既成の理論の枠内においてしか有効ではないであろう。既成の理論において同一とされた対象が、改訂された理論においては識別されうるかもしれないからである。これは、まさにギーチが主張していた論点なのである。

3. 同一性の意味と真理条件

確かに、相対的同一性の主張は、伝統的な同一性概念の改訂を迫るような印象を与えるものであった。しかし、ウィギンスの失敗が示唆しているように、実際の適用のうちにギーチの主張に矛盾する事実は見出されない。実際、ギーチ自身はこうした事実に依拠して、同一性の基準は同一性関係に論理的に先行すると結論しているように思われる。しかし、ペリーによれば、こうした事実から基準の論理的先行性は導出されえない。ギーチの指摘した事実は認めざるをえないが、こうした帰結を導く過程で、ギーチは議論の核心を変質させているというわけである (1970, p. 184)。

実際、ギーチはどのように議論を変質させているのだろうか。それをペリーは明らかにしてはいない。しかし、その手掛かりは、以下のクワインの発言のうちに含意されているように思われる。「物体や人格や集合の同一性条件を提示するとき、われわれはそれに先立って「物体」、「人格」、「集合」といった名辞を説明するために同一性の概念を使用している」(Quine, 1972, p. 489)。以下では、ここに含意されているギーチの誤りを、具体例を用いて明らかにしてみよう。

ガリレオが木星の衛星を発見した過程は、概ね以下のようなものであった。(1) 前日には木星の東側に観測されたのと質的に類似した天体が、その日は木星の西側に観測された。(2) この天体が同一のものであるとすれば、その運動は天文学的計算とは一致しない。ガリレオはこの天体が同一のものであると判断し、観測結果(それは、観察時刻、木星を中心とした一次元座標、若干の質的変化によって表現される)からその運動を推測する。(3) すると、木星の周りを回転していると推測される。(4) それ以後、この運動法則に基づいて予想された位置に観測された天体は「メディチ星」と呼ばれることになる。(山田慶児、谷泰訳『星界の報告』、岩波文庫、1976年、42～74頁参照)

ガリレオが(1)において同一性を見出しているとしても、それは質的同一性以上のものではない。しかし、ガリレオは(2)において、質的同一性には還元

できない「より強い同一性」、すなわち個体的同一性を対象に帰属させている。このことは、実際の適用に先立って、そうした同一性概念をガリレオが予め所有していたことを示している。実際、どんな特定の基準にも依存しない個体的同一性の概念をもつこと、あるいは、そうした概念を表現する名辞の使用法を知っていること、このことは、そうした名辞があらゆる同一性言明において一義的に使用されるための必要条件である。さもなくば、同一性の基準が異なる毎に、そうした名辞は同名異義的に使用されることになろう。この意味で、絶対的同一性の支持者は正しい。

しかし、このことは、われわれが同一性言明の真理条件を知っていることを意味しない。(3)と(4)から示唆されるように、そのようなものは理論相対的にしか与えられないであろう。実際、ある同一性言明が真であるとは、「いまのところ、それを覆す観察結果には直面していない」という事実以上には何も意味していない。この意味で、相対的同一性の支持者は正しい。絶対的同一性と相対的同一性との対立は、このような二つの点、すなわち、同一性記号の「意味」(使用法)と同一性言明の「真理条件」とを混同したところに端を発している。つまり、両者の対立、とりわけ論理的先行性をめぐる対立というその概観は、真理条件の意味論が産みだした幻想に過ぎなかったのである。

4. Rの可能性とその身分

相対的同一性と絶対的同一性との対立を幻想として抹殺したとしても、依然としてRの事例はわれわれに遺されている。これらは如何に取扱われるべきであろうか。日常言語の曖昧さによって生じた蜃気楼にすぎないのであるか。絶対的同一性の支持者たちが、そのように考えていたのは間違いない。たとえば、ウィギンスは以下の三点からRの事例を分析することによって、そのすべてを棄却している。(1) 時制関係の混乱が見出される。(2) 他の用法とりわけ「構成」(constitution)のBe動詞が、同一性のBe動詞と混同されている。(3) 固有名が

曖昧なままに使用されている(1980, pp. 23-43; cf. Perry, 1970, 199-200)。

しかし、このような批判をギーチが認めることはなかった。確かに、ギーチが実際に与えている証明は、Rの可能性を示唆するに十分ではないように思われる。しかし、その欠点を分析することによって、少なくともRの可能性の条件を提示することは可能であるように思われる。そのために、まず彼の証明を概観することにしよう。

ギーチの証明は以下のように進められる。理論Tの対象領域を言語表現とせよ。ただし、Tにおいては同一のタイプの二つのトークンを識別できないものとする。Tの述語 E_{xy} は「xはyと同じ形である」を意味するとしよう。その場合、トークンが識別されえないのであるから、 E_{xy} はTにおいて同一性を表現することになる。いまTに同形トークンを識別する述語を付加したとする。この拡張された理論T'においては、トークンが識別されるのであるから、もはや E_{xy} は同一性を表現していないことになる。ゆえに、同一性は理論に相対的である(1967-8, pp. 5-6)。

もしこの証明によってRの事例が示されているとすれば、それは以下のように表現されるであろう。「xはyと同一のタイプではあるが、同一のトークンではない」。しかし、これがRの事例であるとは考えがたい。タイプしか識別しえないTにおいて「xはyと同一のトークンではない」という言明は出現しえず、T'においては「xはyと同一のタイプである」という言明が同一性の表現ではなくなる(この言明はT'では $(x =_F y)$ ではなく $(Fx \wedge Fy)$ のように表現されるべきであろう)。ギーチがRの事例と見なしている言明は、TのうちにもT'のうちにも生じえないのである。実際、これはクワインの批判の論点であった。対象は理論毎に相対化されねばならない。それゆえ、Tの対象は表現タイプであるが、T'の対象は表現トークンであるというわけである(cf. Quine, 1953/80, pp. 70-1)。ギーチはこれに反対して、Tにおいても対象は表現トークンであったと主張する。そして、対象を理論に相対化するならば、「古典的なマイノク流の存在論」を採ることになると切り返すのである(1967-8, pp. 8-11; 1973, pp. 298-301)。しかし

ながら、これは誤解に基づくアド・ホミネムな反論にすぎず、わざわざ耳を傾けるまでもない (cf. Noonan, 1997, pp. 642-5)。ここでは、ギーチの戦略が直面する困難を指摘しておけば十分であろう。

確かに、われわれが実際に知覚しているのは、表現タイプのような普遍者ではなく、表現トークンであると考えるのは自然である。そこから、ギーチのように、Tにおいても x や y によって指示されていた対象は表現トークンであったと考えられることになる。しかし、T'で同一とされた対象が、更に拡張された理論 T''では識別されうるかもしれない。どんな理論の拡張にも耐えうるように存在論を固定しておくとするれば、いったい何処に固定しておけばよいのか。かくて、ギーチもまたウィギンスと同じような困難に直面することになる。ウィギンスが絶対的同一性を維持するために完成された理論という虚構を想定せねばならなかったように、ギーチもまた対象の絶対性を維持するために、最大限に拡張された理論という虚構を想定せねばならなくなるであろう。

ギーチの証明は失敗に終わっているとはいえ、そこにはRの可能性の条件が示唆されていると思われる。すなわち、Rが複数の理論を要求するということがある。もし単一の理論のうちにRが生じるとすれば、その理論は整合的ではないであろう。その意味で、Rはメタ理論的言明としてしか成立しえない。しかしながら、上述のように、ギーチは二つの理論が対象領域を共有することを示すのに失敗している。理論の拡張という方法を使った場合、こうした失敗は不可避免であるように思われる。したがって、Rの可能性を示すためには、ギーチとは別の戦略によって、二つの理論が対象領域を共有する可能性を探求しなければならない。

この可能性は、F・ソマーズの「ヘテロタイプの存在者」を援用することによって示されうるように思われる。まずソマーズは存在者タイプの相違を以下のように定義する。「 Fx も Gy も有意義であるにも関わらず、 Fy も Gx も無意味であるとするれば、 x と y は異なったタイプの存在者である」。この定義によれば、土地と社会制度は異なったタイプの存在者である。なぜなら、土地は測量学の対象で

ありうるが政治学の対象ではありえず、社会制度は測量学の対象ではありえないが政治学の対象ではありうるからである。ソマーズによれば、このような事実は「日本」のような存在者がヘテロタイプであることの証拠となる。なぜなら、日本は山が多いといった測量学的特徴を有するとともに、民主的であるか否かといった政治学的特徴をも有するからである (1978, pp. 225-7)。

われわれがヘテロタイプの存在者を認めるとすれば、同一の対象が複数の理論の対象領域に帰属しうることになる。しかしながら、ソマーズが利用している証拠は、「日本」のような固有名の指示が多義的であることの証拠としても利用されうる。実際、これが絶対的同一性の支持者たちの戦略であった。しかし、このような戦略もまた決定的なものではない。P・F・ストローソンによれば、本稿冒頭で取り上げたRの事例、「ジキル博士とハイド氏は同一の間人ではあるが同一の人格ではない」のうちに指示の多義性は存在しない。意識状態と身体的特徴とを違ったものに帰属させることが混乱の源泉であることは、彼が繰り返し主張していた論点であった (1959, Ch. 3)。こうした主張を認めることによって、われわれはRの事例を手に入れることになる。実際、ストローソンの主張の是非をめぐっては、いまだ議論の余地があるかもしれない。しかし、少なくともソマーズの試みは、ストローソンの主張に存在論的な基礎を与えるものであると思われる。

終わりに

本稿では、ギーチが惹起した論争を幻想として斥けつつ、ギーチがその抛り所としていたRの事例を保持する可能性を検討してきた。突き詰めて言えば、その可能性の根拠は、われわれが一つの言語表現を複数の理論において使用することがあるという事実以上ではない。しかしながら、われわれの言語的实践は、必ずしもRを支持するような証拠だけを提供しているわけではない。Rの事例はある意味では矛盾した主張であるにも関わらず、われわれがそれを発話することに

よって後ろめたさを感じることはない。こうした事実は、「理論は各自に固有の対象領域をもつ」という見解へとわれわれを促すかもしれない。

しかし、因果的決定論は自由意志と両立しないという主張はわれわれを不安に陥れるし、ミクロ・サイエンスにおいて物理的对象は決定論的には振る舞わないという事実は、マクロ・サイエンスが与える決定論的世界観に動揺を与える。確かに、対象領域を理論毎に独立化することは、こうした不安や動揺を取り除くための手軽な選択肢ではある。しかし、Rの事例を発話することによって後ろめたさを感じないことが、われわれの言語的实践において自然なことであるのと同じように、こうした不安や動揺が生じることもまた自然なことであるように思われる。どちらを支持するにせよ、こうした自然な事実が置き去りにされてはならないであろう。

文献表

- Geach, P. T. 1962/80** *Reference and Generality*, 3rd edition, Cornell UP.
— 1967-8 'Identity', in *Review of Metaphysics* 21, pp. 3-12.
— 1973 'Ontological Reality and Relative Identity', in *Logic and Ontology*, ed. by M. K. Munitz, New York UP., pp. 287-302.
- Noonan, H. 1997** 'Relative Identity', in *A Companion to the Philosophy of Language*, ed. by B. Hale & C. Right, Blackwell, pp. 634-52.
- Perry, J. 1970** 'The same F', *Philosophical Review* 74, pp. 181-200.
- Quine, W. V. O. 1953/80** *From a Logical Point of View*, 2nd edition, revised, Harvard UP.
— 1964 'Review of Geach, P. T., *Reference and Generality*', in *Philosophical Review* 73, pp. 100-4.
— 1972 'Review of Munitz, M. K. (ed.), *Identity and Individuation*', in *Journal of Philosophy* 69, pp. 488-97.
- Shoemaker, S. 1971** 'Wiggins on Identity', in *Identity and Individuation*, ed. by M. K. Munitz, New York UP., pp. 103-117.
- Sommers, F. 1978** 'Dualism in Descartes: The Logical Ground', in *Descartes: Critical and Interpretive Essays*, ed. by M. Hooker, The John Hopkin UP., pp. 223-33.

Strawson, P. F. 1959 *Individuals*, Methuen.

Wiggins, D. 1980 *Sameness and Substance*, Basil Blackwell.

付記 本稿は日本学術振興会研究奨励金、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。